平成２６年度　国語科の授業改善のための方針

１　昨年度の成果と課題（☆成果　●課題）

☆平成２４年度からの研究内容である、「言語活動の充実」を意識した授業を継続したことにより、自分の考えを表現することへの抵抗が少なくなり、自信を持って話したり書いたりすることができるようになってきた。

☆文学的文章や説明的文章の読解において、基本的な用語を低学年から「学習の引き出し」として指導することを通して、自力で文章を読み取る力をつける系統のさらなる充実が図られてきた。

●用語の指導を通して自力で文章を読み取る力を身に付けるには、1 年生からの積み重ねが重要であるため、今後も「学習の引き出し」による指導を継続していくとともに、次の学年に引き継ぐために指導事項を整理することが必要である。

●対話・記録・要約・説明・感想・発表・討論・解説・論述・鑑賞など、多様な言語活動を、様々な教科のなかで経験させることで、国語科を中心とした言語能力の向上につなげることが大切である。

２　今年度の児童の実態

①　６年生を対象に実施した、「全国学力・学習状況調査」の分析結果

A 問題：「いわう（祝う）」の書き取りと、故事成語「五十歩百歩」「百聞は一見にしかず」の問題の正答率が平均よりも低く、漢字の訓読みと伝統的な言語文化に課題がある。

B 問題：詩の読解に関する４問が平均以下であった。特に、詩の解釈に関する正答率は都 49.6%に対して泉小 37%であり、1 年生から 5 年生までの詩の学習をより系統的に進めていく必要がある。

②　５年生を対象に実施した、「平成２６年度　児童・生徒の学力向上を図るための調査」から抜粋して、領域ごとの課題を以下に挙げる。（　　）内は、正答率の東京都平均である。

○「話すこと・聞くこと」（56.8%）　78.4%という高い正答率で、メモを取る力も含めて聞く力が身に付いているといえる。

○「書くこと」（72.6%）　55.4%であり、物語の組み立て方や、文章の推敲に課題がある。

○「読むこと」（68.3%）　64%であり、東京都平均とほぼ同等である。大問５（２）の登場人物の気持ちを想像する問題の正答率が 45.9%であることから、物語における人物の心情の読み取りに課題があるといえる。

○「読み取る力」（54.9%）　27%であり、都平均の半分である。資料Ａをもとにして、資料Ｂの３つのカードを分類する問題であることから、比較・関連づけて読み取る力に課題があるといえる。

③　行事や授業で司会をしたり、話したりする経験が多く、話すことへの抵抗感が少なく、大きな声ではっきりと話すことができる児童が多い。しかし、自信をもって話したり、意図をもって聞いたりすることへの苦手意識が見られる。

④　日記指導など、日常的な書く活動の継続により書くことへの抵抗が減ってきた。

⑤　文章表記の約束（句読点、「」の使用、作文用紙の使い方等）が不十分な児童がいる。

⑥　文字を正しく読んだり書いたりする力がついてきてはいるが、個人差が大きい。

３　今年度の方策

①□授業中の指導

・読む（音読・黙読・朗読等）活動の恒常化
・文学的文章、説明的文章の読み取りの基本の指導
・ノート指導の充実
・話す・聞く活動の設定（朝の会でのスピーチ、授業での対話、ペアやグループや学級全体での話し合い）
・文章表現力向上のための書く活動の設定
・他教科に関連付けた「伝え合い」

②全校での指導

・読書活動の充実（朝読書の時間の確保や、読書旬間の充実）
・読解の手立ての具体化
・具体化された読解の手立てをもとにした、文章表現力向上のための書く活動の設定
・辞書活用の習慣化
・『話型』『声の大きさ』の提示
・ひらがな、かたかな、漢字練習

４　学年ごとの重点目標

学年	重点目標
1 年	簡単な文章が書けるようになってきたので、日記や作文を書くなかで表現力を高めていく。
2 年	報告文の書き方を最初に全体で学習した後、構成や表現を工夫している児童の作品を紹介したり、いっしょに書き直したりすることで書く力を高めていく。
3 年	週に一回、作文の課題を出し、はじめ・中・おわりの型で書かせ評価する。改善するポイントを示し、再構成させる。
4 年	内容だけでなく、効果的な述べ方や書きぶりを学び、自己の表現に活用できるようにさせる。
5 年	国語以外の教科でも、辞書を引く習慣をつけさせ、短文から、文章に慣れさせていく。
6 年	要点のとらえ方、要約の仕方、要旨のとらえ方などを指導し、自力で読み取ることができるようにしていく。